品川哲彦「『超政治』の政治責任」へのコメント

轟　孝夫[1]

はじめに

本稿は第 60 回哲学会ワークショップ「ハイデガー哲学の政治性」（2021 年 10 月 30 日、Zoom 開催）における品川哲彦氏の報告「「超政治」の政治責任」に対する私の応答として執筆されたものである。私自身はそのワークショップで「ハイデガーのナチス加担――その学問論的背景」というテーマで報告を行った。

同ワークショップにおける品川氏の報告は、2020 年 3 月に刊行された拙著『ハイデガーの超 - 政治』[2]に対する批判的検討をその主たる内容とするものであった。そこではとりわけ、ハイデガーの「ユダヤ人と呼ばれる人間への配慮」の欠如が問題視されている[3]。この道徳的非難は、その幾分かはこうしたハイデガーの態度を無批判に紹介する私にも向けられたものだろう。ワークショップにおいて品川氏の報告に対して応答する機会は設けられていたが、この批判に対しては意を尽くした反論ができなかった。幸いにして今回、『倫理学論究』に私の報告が掲載できることとなり、同時に品川氏の報告に対する私のコメントにも紙幅を与えられたので、拙著に対する品川氏のご批判により十分な形でお答えできればと思う。

以下で示すように、私自身はハイデガーの思想にユダヤ人に対する配慮が欠如しているという批判は当たらないと考えている。しかし拙著が読者にそのような印象を与えうるということは、拙著の説明の至らない点として受け止めねばならない。ユダヤ人に対する不適切な言動という嫌疑を受けることは、ハイデガー自身が「黒いノート」の刊行によってその憂き目にあったように、当人の道徳的信頼性にきわめて大きなダメージを与えないではすまない。それゆえ私のテクストのどのような箇所が問題なのかを具体的にご指摘くださった品川氏には心から感謝したい。そしてここであらためてハイデガーの真意を説明するこ

1　轟孝夫（とどろき　たかお）。防衛大学校人文社会科学群教授。

2　轟孝夫『ハイデガーの超 - 政治――ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』明石書店、2020 年。

3　品川哲彦「『超政治』の政治責任」、『倫理学論究』、vol. 8, no. 1(2022), 48 頁（本号）。

とによって、そうした嫌疑を払拭することを試みたい。

1. ユダヤ人迫害に対するハイデガーの批判

品川氏はハイデガーがナチズムに対する批判を展開したことは認めておられる。しかしそれは「ナチズムがハイデガーの期待する哲学的運動とはならなかったからであって、ナチズムによって害された人間のためではない」と、その批判の射程に留保をつけられている[4]。

私は品川氏のこうした見解に異を唱えたい。ハイデガーはナチズムが現代のニヒリズムの克服を目指す対抗運動という性格をもちながらも、結果的にニヒリズムの本質をなす主体性の形而上学を相対化できず、むしろその無条件の貫徹を促進する存在になってしまったことを厳しく批判した。ハイデガーはこの主体性の歴史の帰結が「意志への意志の残虐性」であると述べており(GA97, 45)[5]、またそれが「大地の荒廃」と「人間本質の無化」をもたらすとも表現している(GA77, 207)。こうした主体性の形而上学についての所見は 1942 年から 1945 年のあいだに示されたものである。

これらの所見は原理上、あらゆる近代的主体に適用されるものではあるが、当時の文脈においては当然のことながら、殲滅戦という災厄をヨーロッパにもたらしたナチズムの暴走を何よりも念頭において書かれたものである。このようにハイデガーがナチズムの害を認めるとき、ナチズムによって害された人間がそこでまったく問題にされていないことはありえない。

そもそも拙著『ハイデガーの超 - 政治』第 2 章で詳しく分析したハイデガーの「ユダヤ的なもの」をめぐる覚書にしても、それらはナチズムによるユダヤ人に対する迫害がいかに無意味なふるまいであるかを際立たせる趣旨で書かれている。しかもそうしたユダヤ人迫害を批判する覚書は、同書で私が示したように、ホロコーストが始まる以前から、すなわち 1938 年 11 月にドイツ全土で発生した反ユダヤ主義暴動に敏感に反応する形で書かれている。こうしたハイデガーのユダヤ人迫害に対する批判が「ユダヤ人と呼ばれる人間への配慮」ではないと言うのであれば、およそどういったことが「ユダヤ人と呼ばれる人間への配慮」として認められうるのか、私にはよくわからない。

4　品川哲彦、前掲、36 頁。

5　本稿でのハイデガー全集からの引用箇所は、全集版（Gesamtausgabe＝GA）の巻数と頁数を記載することによって表示する。

２．ホロコーストの教訓

品川氏はハイデガーのブレーメン講演（1949 年）のよく知られた一節――「農業は現在、機械化された食品工業である。その本質にかんしては、ガス室や殲滅キャンプにおける死骸の製造と同じであり、経済封鎖や国家の兵糧攻めと同じであり、水爆製造と同じである」――を、ハイデガーがユダヤ人の運命に対して無頓着であったことを示す証拠として引用されている。品川氏はラクー＝ラバルトのハイデガー批判を踏襲しつつ、「他の事例が経済的・政治的・軍事的効率性に裏づけられているのに、ホロコーストにはそれがない」にもかかわらず、ハイデガーがそれらをゲ - シュテルという視点から同一視するという「論理的な誤り」を犯しているのは、彼が「生身の人間に及ぶ害を他の問題以上に重視していなかったから」だと批判する[6]。

今日においては「ユダヤ人に対する配慮が足りない」という非難以上に、ある人物の道徳的信頼性を失墜させる非難はないだろう。しかしそうした指弾にうろたえることなく、落ち着いて考えてみると、品川氏の議論がそれほど「論理的」だとも私には思えないのである。例えば「水爆製造」、ないしはよりわかりやすく言えば、核兵器による数十万人の市民の殺傷などは、ガス室での殺害と比較して、どの程度「経済的・政治的・軍事的効率性に裏づけられている」と言えるのだろうか。ナチス体制下においては、ユダヤ人の強制的移送とその殺害も、現代において水爆製造が経済的・政治的・軍事的に効率的だと思われている程度にそう思われていたのではないか。つまりホロコーストはドイツにおいてそれに関わっていた人々にとって、現代人にとって水爆製造がその経済的・政治的・軍事的効率性という観点から自明である程度には自明だったのではないか。

われわれがホロコーストの教訓を真剣に受け止めるなら、むしろわれわれはそうしたことを自明としていた世界と地続きの世界に生きており、すなわち自分たちが知らず知らずのうちにそうしたものに加担し、逆にまたそうしたものの犠牲者になってもおかしくないことを自覚すべきであること――これがブレーメン講演のつねづね問題視される一節の意味するところだろう。逆に今日のわれわれが、自分たちはナチ時代のドイツ人よりもすぐれた道徳性を備えており、反ユダヤ主義とも無縁だから、ナチズムの轍を踏まないのだと自負

6　品川哲彦、前掲、36 頁注３。

しているとすれば、それは根拠のない思い上がりであり、むしろそれこそがゲ - シュテルの円滑な作動を促進するイデオロギーとして機能していること、このことにハイデガーは注意を促しているのである。

３．近代国家の地盤喪失性

品川氏は「複数の人間の利益の調整とそれによって人間共同体の存続を確保すること」が「政治の課題」だと述べ、「超政治はその課題には対応しない」と述べている[7]。品川氏の指摘はまったくそのとおりで、ハイデガーも自分が政治の本質と考えるものが通常の「政治の課題」と異なる次元にあることを十分に意識して「超 - 」政治と名づけているのである。

ハイデガーは今日、通常の意味で政治と呼ばれているものの本質を主体性の形而上学のうちに見て取っている。この主体性はまさにおのれの「存続の確保」を目指し、そのために世界の支配を際限なく追求することをおのれの本質とする。品川氏が報告で言及されている、レヴィナスが言うところの「世界の所有」もこうした主体性の動向を捉えたものだと言ってよいだろう。ハイデガーは超政治ということで、まさにこのような主体性の形而上学の克服を目指していた。ということは逆に、超政治を否定することは、政治をあくまで主体性の形而上学の光学のもとで捉えることを意味することになる。

ここで注意せねばならないのは、こうした世界の所有をどこまでも追求する主体性のあり方のうちに、ハイデガーが地盤喪失性を見て取っていたということである。ところが品川氏は世界を所有するという存在様式を、ハイデガーが地盤喪失性に対置して称揚する土着性の方に割り当てている。このことから、イスラエル国家を樹立したユダヤ人も地盤喪失的であるどころか、むしろ「ハイデガー的世界と「場」の迷信」に染まっていると見なされることになる。（この誤解はよく見られるものである。「黒いノート」の編者ペーター・トラヴニーも、かつて日本で開催された「黒いノート」をめぐるシンポジウムの席上で、「ハイデガーはユダヤ的なものを地盤喪失性と結びつけているが、ユダヤ人がイスラエルを創設したことを見れば、ユダヤ人が本質的に地盤喪失的な存在だと言うことはできない」とコメントしていた。）

しかし繰り返せば、ハイデガーはおのれの支配の拡大を落ち着きなく目指す主体性のう

[7] 品川哲彦、前掲、52 頁。

ちに地盤喪失性を見て取っていた。つまり彼からすると、そうした主体性に基づいた近代国家はしかるべくして地盤喪失的だと見なされるのである。彼にとっては、「存在の真理」に出で立つあり方こそが土着性を意味していた。より具体的に言うと、存在者の存在が形作る世界を見守り、またそうした世界によっておのれを規定されるがままにすることが、ハイデガー的意味での土着性である。つまり存在こそが土着性の根拠であり、それゆえまた存在から切り離された主体性は本質的に地盤喪失的なものと捉えられるのである。

存在という拠り所を見失った現存在は、不可避的に存在者の操作的支配におのれの根拠を求めるようになる。こうしたあり方は『存在と時間』では「頽落」、すなわち「非本来性」と呼ばれており、レヴィナスが世界の所有として捉えたあり方に該当する。これはハイデガーの立場からすると、「場」に束縛されたあり方というよりは、むしろ「場」の否定を本質とするあり方と見なされる。というのも、世界の所有は本性上、つねにおのれの支配領域を広げようとする傾向をもち、それゆえにひとところに落ち着くことができないからである。

まさにレヴィナスが称揚した宇宙飛行も、こうした主体性の本質動向の帰結である。彼は人工衛星の打ち上げの意義を「場を離れたこと」のうちに認めている。ところで今日、このような宇宙空間の支配を追求しているのは国民国家であり、宇宙空間に人を送り込む能力が国家の力の指標であると見なされている。まさにこのことのうちに、国家こそが「場を離れること」を肯定し、それをどこまでも推進する存在であることがはっきりと示されている。レヴィナスの議論に従って、宇宙空間の開発のうちにユダヤ的なものの体現を認めるのであれば、国家がそうした宇宙開発の推進勢力である限りにおいて、国家そのものがユダヤ的なものを促進する存在であることが導かれる。

われわれは通常、国民国家と国家をもたないユダヤ人を対立するものとして捉えている。しかし少なくともユダヤ的なものの本質を「場を離れること」のうちに見て取る限りにおいては、今も述べたように、そうした対立は必ずしも成り立たない。むしろ両者は「場」を否定し、それに縛られない点で、等しい本質をもっている。まさにこのことをハイデガーは「黒いノート」において、ユダヤ人を地盤喪失的な存在として非難するナチス自身が地盤喪失的なのだというレトリックによって表現しているのである。

ここで「地盤喪失的だ」というのは、ナチスが主体性の形而上学によって徹頭徹尾、規定されていることを指している。そしてこの主体性のあり方は、世界の技術的支配に基づいたナチズム、ひいては近代国家の動向そのものとして示されている。したがって、その理解の

ためにユダヤ人のステレオタイプ的表象を引き合いに出す必要はまったくない。むしろ主体性の本質は彼の存在の思索において、そうしたステレオタイプとはまったく独立に規定されうるものである。

４．政治の所在

私は拙著の注で、「今日の哲学関係の学会」では研究者がレヴィナスを持ち上げつつ、返す刀でハイデガーを批判することがありふれた光景になっていることを指摘し、その理由をレヴィナスの哲学的立場の時代適合性に帰した[8]。品川氏は報告に付された注で、この拙著の議論を紹介し、「今日の哲学関係の学会」の参加者がレヴィナスに与するのは、日本で西洋哲学を学ぶことが一種の地盤喪失性を要請するからではないかという仮説を提示されている。私が拙著の注で述べようとしたのは、まさにこのような地盤喪失性の肯定がテクノロジーに対する批判の不可能性を含意し、それゆえテクノロジーの推進勢力としての近代国家の無自覚の是認を帰結するということだった（これはおそらく彼らの意図に反したことだとは思うが）。

レヴィナスの宇宙飛行に対する態度のうちに示されているのは、元来、対立的なものだと考えられている国民国家と「ユダヤ的なもの」が、実は地盤喪失性の肯定という点において、まさに同一の形而上学的基盤をもつということである。ハイデガーが「黒いノート」において、ナチスはユダヤ人を迫害しているが、ナチスこそがユダヤ的なものなのだというレトリックを使用しているとき、彼は今述べたような事態を念頭に置いている（そういえば、ロケット技術を「報復兵器」として最初に実用化したのもナチス・ドイツであった）。

この観点からすると、ユダヤ人との対決を標榜するナチスの「政治」はそれこそ茶番でしかないということになる。また私がワークショップの報告で述べたことだが、自由主義的学問の没政治性を批判し、学問に国家や民族に貢献するという意味での政治性を求めるドイツ学生団にも同様の批判が当てはまる。ハイデガーはこれらの「政治」が既存のものに対する反対を唱えながらも、結局はそうした既存のものと同じ形而上学的地平にとどまっており、主体性による世界支配のあくなき追求を自明化するものでしかないことを問題視するのである。このような「政治」の圏域においては、そこで登場するあらゆる「アンチ」は、

8　拙著『ハイデガーの超 - 政治』、前掲、281 頁。

その「アンチ」がそれに対して反対しているところのものと同じ「本質根拠」に由来するものでしかない、こうハイデガーは批判する。つまりそこに真の意味での対立は存在しないと言うのである。

ハイデガーがこのような政治に対置するのが、存在を気遣い、見守ることそのものを意味する「超 - 政治」である。（この超 - 政治の実質的な内容については、ここでは詳しく触れる余裕はないので、関心をおもちの方は、拙著『ハイデガーの超 - 政治』を参照していただければと思う。ここではあくまで形式的な議論にとどめざるをえないことをご了承願いたい。）ハイデガーは通常の政治と超 - 政治のあいだにこそ真の本質的な区別を認めており、通常の政治の枠内における諸立場の対立は、上述のように本質的な対立とは認めない。そこではおのれの力の伸張を目指す主体性のあいだの争いしかないのである。つまり品川氏のように「複数の人間の利益の調整とそれによって人間共同体の存続を確保すること」を「政治の課題」と見なす限り、主体性の形而上学を相対化することは原理上、不可能である。

結　語

以上の議論との関連で言うと、ハイデガーが「放下」と呼んでいるのは、こうした通常の意味での「政治」から一定の距離を置く姿勢を指している。このように通常の「政治」から距離を取るためには、その「政治」を根底において突き動かしている力、すなわち主体性の形而上学をその本質において認識することが前提となる。そして主体性の形而上学がその本質において地盤喪失的であり、この地盤喪失性が人間の存在への根源的な帰属を前提とする概念だとすれば、放下において究極的には「存在の思索」の遂行が求められている。

もちろん現実上は、品川氏のおっしゃるような「複数の人間の利益の調整とそれによって人間共同体の存続を確保すること」をわれわれは無視することができない。ハイデガーもこのことは否定しない。だからこそ、放下は技術的なものの不可避的な利用に関しては「然り」を述べるものだともされているのである(GA16, 527)。しかし同時に、ハイデガーはこうした主体性の形而上学に基づいた政治だけが、政治の唯一の可能性かを問うている。もしそれ以外の政治の可能性を認めないのであれば、つまり超 - 政治が「空虚な言説」にとどまると言うのであれば、われわれは主体性の形而上学の地盤喪失性がもたらす破壊性、暴力性を相対化することができず、それをなしくずしに是認するという袋小路に陥るだけだ――ハイデガーの立場はこうまとめることができるだろう。

品川氏は「存在」が「対等な者同士による相互主観的な認定を欠いたところで」語られるものにでしかないと述べている[9]。これはまさにその通りだろう。ハイデガーは「存在」について語ることによって、「対等な者同士の相互主観的な認定」が生起する「公共性」において、何が隠蔽され、抑圧され、それがどのような帰結をもたらしているのかを示そうとしていたのである。

本研究は JSPS 科研費 21K00023 の助成を受けたものである。

[9] 品川哲彦、前掲、52 頁。